

■企画展2 関連講演会（第1回）

北陸における弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物とその背景 - 新潟県を中心に -

滝沢 規朗（新潟県教育庁文化行政課）

はじめに

皆さん、こんにちは。ただいま、ご紹介をいただきました滝沢と申します。よろしく申し上げます。今日は新潟市さんから企画展の関連講演会、北陸における弥生時代から古墳時代の大型竪穴住居・掘立柱建物とその背景という題名で話をしろと言われたのですが、なかなか難しい問題です。その背景について、私からズバッと言うことは難しいです。私は新潟県で生活しているので、北陸と言いつつも、新潟県を中心に話をさせていただきます。この時代の建物にどういったものがあり、大きさがどれぐらいで、どのような建物の構成かという、基礎的な話をさせていただいてから、最後に少し考えていることが付け加わればなと思っております。長丁場ではありますが、よろしく申し上げます。座ってお話をさせていただきます。

本日のお話の構成です(スライド2)。縄文時代から弥生時代へという、簡単に導入部分のお話をさせていただいたあと、弥生時代後期に古津八幡山遺跡の重要性についてお話をさせていただき、弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物がどのような状況になっているのかという背景を、パワーポイントを主に使って話をさせていただきます。

1. 縄文時代から弥生時代へ

最初に、縄文時代から弥生時代でどんな変化があったのかを簡単に触れます(スライド3)。これは高校の教科書でよく出ているものですが、水田がつくられるようになります。縄文時代は主に木の実ですとか、魚をとったり、動物をとったりというのが主体だったのが、弥生時代に入り稲作が導入されると、比較的安定的に食料が確保できるようになりました。実際はちょっと違うのかもしれませんが、そういうことが言われています。②として金属器。今まで一番硬い道具は石器だったのですが、鉄や青銅器が導入されたということになります。③戦いの村。水田稲作、安定的な食料が確保できるようになると、それをめぐって水利等々で、周辺地域との小競り合

いから始まって、さらに収奪が繰り返され、小さい国々が全国的に広がり、それが権力を求めて戦いが行われたという考えです。④以降は、教科書にあまり出てこないものですが、ガラス製品が出てきます。また、縄文時代は地べたを掘りくぼめてお墓をつくるのですが、弥生時代になると方形周溝墓というお墓がつくれます。周りに溝を掘って、その掘った土を一度盛り上げて、盛り上げた地からお墓の穴を掘るものです。あと製品として、鳥形の製品や、弥生の記号などが弥生時代になると入ってくると言われています。

これらは、弥生時代になって一斉にバーッと全国的に広がったというよりは、かなりモザイク状に広がります。例えば東日本ですと、弥生時代前期から全ての地域で稲作が導入されたようではないようです。弥生時代の中期の終わりごろに導入されます。

また、金属器もそういうことが言えると思います。弥生時代の初頭ではなくて、中期の後半ぐらいに東日本に広がってくると思います。ここに書いてある項目は、モザイク状に地域的、時期的に広がっていくと考えています。

画像(スライド4)を使って、補足させていただくと、大陸から渡来系の弥生人が来て、文化が変わっていったと言われております。見つかった人骨から、顔を復元していきますと、少し彫りの浅いのが渡来系の弥生人で、縄文人は比較的彫りが深くて、骨格がしっかりしていたと言われております。

稲作の導入ですが、上の画面(スライド5上)には稲作風景が出ています。台地を耕して収穫をしていくということが、大きな違いかと思えます。縄文時代の木の実のは、比較的安定した収穫量が誇れるかということ、そういうことでもありません。先ほどご紹介いただいたように、私が旧朝日村の奥三面という所で縄文時代の遺跡を掘っているときに、トチの実やクルミ、栗を山の中に入って、3年ほど収穫実験をしたことがありました。意外と年によって収穫がマチマチで、採れる年、採れない年というのが結構はっきりしていました。採れるときにしっかり

採って、それを長期的に保存するような加工をしていました。収穫量が少ない年は、前年に採った木の実を食べ、ほかの食料で補っていたと考えられます。

弥生時代の稲作でも、収穫量は比較的安定はしているとは言いつつ、品種改良等はまだまだ進んでおりませんので、冷害等もあり、そんなに安定したものではなかったと思います。弥生時代の前期には、東北まで水田稲作が広がっていきます。これ（スライド5下）は青森県で見つかった田んぼですが、その後中期・後期と、東北でしっかりと水田が経営されたのかと言うと、そういうことでもないようです。特に東北は安定した水田の経営がなされず、そのボーダーが、恐らく新潟県のこの辺りかと思っています。阿賀野川から北に行きますと、少し違った文化が広がっています。阿賀野川から南の地域は、比較的水田の導入後は安定した経営がなされていったと考えています。

次に金属器ですが、これは（スライド6左）よく見る銅鐸と鏡です。弥生時代に導入されたと言われていますが、残念ながら新潟県に、この銅鐸は見つかっていません。一番それに近いものが、粘土をこねてつくった銅鐸型土製品です。これは上越市の吹上遺跡から見つかっています。なかなか新潟県は銅鐸が出ないので、研究も進みませんが、西日本の方に吹上遺跡の銅鐸型土製品を鑑定していただいた限りですと、土製品ではありますが、しっかりと銅鐸の模様の構成を知っていないと作れないものという評価をいただきました。吹上遺跡の人たちは、銅鐸を見られるような状態の文化程度というふうに考えています。残念ながら、今のところまだ新潟県で見つかっていないので、これからどこかで見つかることを祈りつつ、出てきた場合は備えていきたいと思えます。

鉄ですが（スライド6右上）、写真のものは錆びていて、見栄えしません。ですが、これは非常に重要なもので、今まで石でつくっていたものが大きく変わります。古津八幡山遺跡のガイダンス施設に行くと、その映像を見ることができます。木を切るにしても、石の斧と鉄の斧だと、もう作業時間が全然違います。鉄のほうがはるかに速いですよね。新潟市さんの実験の結果を聞き限り、石の斧ですと、木を切るというよりは、削ぐような感じの作業になります。しかし、鉄ですと時間が半分ぐらいになるようです。かつきちんと切れるということで、かなり作業効率が違うと思います。非常に重要なもののご認

識ください。

あと、鏡（スライド6右下）ですが、弥生時代になると青銅製の鏡が入ってきます。残念ながら新潟県では、弥生時代と言えるものは、今のところちょっとはっきりしません。弥生時代から古墳時代の境目ぐらいには、こういったものが新潟県の中にも入ってきていると思います。

次に、戦いの村には入ります。古津八幡山遺跡でもそうですが、集落の周りを濠で囲う村があります（スライド7左上）。この濠も2m以上あるような非常に深いもので、幅も非常に広いものです。一度落ちてしまうと、なかなかはい上がることができないような濠です。これで村の周りを囲うというものが全国的に出てきて、日本海側ですと、新潟県がその最北の分布地になります。戦いが実際にあったのかどうかというのは、これは諸説あってですね、今も学会の中で侃々諤々です。西日本ですと、骨がお墓から出てきたことで、有名な佐賀県の吉野ヶ里遺跡では、首がない遺体が埋葬されているとか（スライド7左下）、あとこれは福岡県の遺跡で、今度は逆に頭だけが埋葬されたものがあります（スライド7右下）。こういうのを殺傷人骨といいます。残念ながら東日本には、ほとんど確認されていません。しかし、西日本の例からすると、かなりの戦いがあったのだらうと思います。

次にガラスですが、青く、非常にきれいなガラスが弥生時代になると出てきます（スライド8左上）。原料は日本産じゃありませんで、すべて外国産になります。非常にきれいで、古津八幡山遺跡でもいくつか出ています。青く輝く、極めて重要な製品と思います。

次の方形周溝墓は、先ほどお話ししたものです。周りを四角形になるように溝を掘りまして、掘った土を盛り上げます（スライド8右上）。盛り上げて墳丘をつくって、そのあと墓坑を掘るというつくりになります。縄文時代には基本的にはなく、弥生時代固有のものと言われています。これが古津八幡山遺跡でも見つかっています。それ以外に鳥形、これも農耕にかかわるものですが、土製品や木製品が、弥生時代になると出てきます（スライド8左下）。縄文時代にはないものです。

あと、弥生時代の記号として、グルグル巻きにこう描いてあるものや（スライド9上左）、線の記号があります（スライド9上中）。上越市の吹上遺跡でも出ていますが、線状の記号状のものが描かれていま

す(スライド9上右)。こういったものが弥生時代になると出てきます。卜骨という骨を焼いて(スライド9下左)、いろんなものを占うというような風習も出てきます。これは鏃ですが(スライド9下右)、磨いて仕上げる磨製石鏃というのが弥生時代に出てきます。こういったものが、縄文と弥生を区分する、弥生文化の特徴というふうに言われているものになります。

こういうのが教科書とか概説書に出てきますが、1つ番外編で、犬についても、縄文時代と弥生時代はかなり様子が違うということをお話しさせていただきます(スライド10)。これ、うちの犬ですが、6月の下旬に亡くなりまして、非常に今寂しい思いをしています。犬が亡くなったのをきっかけに、縄文時代と弥生時代でどんな違いがあるのか概説書で調べてみました。縄文時代ですと、全身の骨がそろって見つかるものが非常に多いです。骨が見つかる、見つからないというのは、その遺跡の特徴、土壌の特徴もあります。全国すべての集落で犬を飼っていたかどうかはわかりませんが、150体以上埋葬されたような状態で見つかっています。全身の骨がそろって見つかるものが多いというのが、縄文時代の特徴です。

一方、弥生時代では、散乱して出てくるものが非常に多いです。弥生時代の遺跡から見つかった犬の個体が、230ぐらいあるらしいのですが、全身が残っているのはわずかに15個体しかありません。この15個体は、恐らく埋葬に近いような形で、見つかっているようですが、大体のものが解体されて見つかっています。中には、骨に刃物で傷つけたような跡もあるということから、食用資源や、犬の毛皮を素材に使用するという指摘がされています。ですので、縄文時代は、主に狩りのお供として非常に大事にされて、死んだあとも手厚く葬られていたものが、稲作の導入とともに大陸から伝わった文化の中では、犬の扱いがガラッと変わってしまいました。愛犬家からすると残酷ですが、弥生時代は犬を食用するような文化だったと言えると思います。縄文時代と弥生時代は連続する時代でありながら、いろんなものが違うと思います。

2. 弥生時代後期に出現した古津八幡山遺跡の重要性

弥生時代になって、いろいろなものが日本全国の中で変わっていく中で、弥生時代の終わりぐらいになると、あの場所に突如、非常に大きい古津八幡山

遺跡が出現します(スライド11)。ここにも書いてありますように、恐らく日本海側最北端にある弥生文化の要素がそろって遺跡というふうに考えています。古津八幡山遺跡は県内では非常に大きい、有数の規模を誇る大規模な集落であります。また、弥生時代後期に始まった集落が、終わる時期は押さえられませんが、古墳時代の前期と言われているところには、一度人があそこからいなくなっているだろうと思います。そのあともお墓が築かれていって、集落廃絶から約数百年たったあとに、新潟県で一番大きい、古墳時代中期に位置づけられる古墳が築造されています。これは非常に、日本国内の歴史を考える上で、重要な遺跡ということで、国の史跡になりました。新潟市さんが一生懸命労力をかけて調査研究を行い、遺跡を整備してきました。今見に行くと芝生がはってあって、建物が復元されていたり、古墳が復元されていたりして、非常に整備が進んでいます。私は冒頭でご紹介いただいたように、教育庁の文化行政課という所において、全国各地の史跡を見て回る機会があります。しかし、弥生時代の終わりから古墳時代の前期、ないしは中期にまたがる遺跡の中で、これほどきちんと調査が行われ、内容が把握され、整備されている遺跡は、あまり東日本の中ではみられません。この遺跡は非常に立派な整備が行われています。東日本では唯一無二ぐらいの調査成果と整備が行われていて、非常に新潟にとっては、重要な史跡になっていることを、地元でいられると感じられないかと思います。あれだけのものはなかなかありません。新潟市の方々は頑張って調査をしておられるので、皆様方におかれましても、いろいろな面でご支援をいただければと思っています。

弥生文化が伝わった日本海側最北の地、またはその1つというふうに申し上げました。新潟県のこの辺りから村上市に向かって見つかっている重要な遺跡を、分布図で落として、それぞれどういったものがどこまで見つかっているのかを示した図であります(スライド12)。まず「戦いの村」ではとされている環濠集落は、古津八幡山遺跡から60km北の村上市の山元遺跡があります。古津八幡山遺跡は最北の分布地ではありませんが、山元遺跡から北に行きますと、環濠集落はないです。山形県ではまだ見つかっていません。環濠集落ということだけ見れば、古津八幡山遺跡は最北ではありませんが、それ以外の要素で見えていきますと、例えば先ほどご紹介した方形周溝墓、弥生時代特有のお墓は、古津八幡山遺

跡が最北です。山元遺跡では方形周溝墓は見つかっていません。縄文時代以来の地面を掘りくぼめただけの、土坑墓というものしか見つかっていません。山元遺跡で見つかっている金属器とかガラス製品は古津八幡山遺跡でも見つかっていて、さらに奥の旧朝日村の遺跡でも見つかっています。そのため、古津八幡山遺跡が最北ということではありませんが、いろいろな要素がそろっているのは古津八幡山遺跡が一番北です。研いで仕上げた磨製石鏃も、弥生文化の特徴の1つだと言いましたが、それも見つかっているのは古津八幡山遺跡が最北です。

そうしたことからすると、阿賀野川が1つのポイントになるかと思えます。古津八幡山遺跡では弥生文化と言われているものがある程度そろっていますが、阿賀野川を越えると、欠落するものが出てきます。ただし、まったくここで途切れるというわけではありません。村上市の山元遺跡では、ちょっと様相が違いますが、環濠、金属、ガラスと、弥生文化の一要素が入っているということから、この辺りが、西日本が中心だった時期に、西日本の文化が伝播する、日本海側最北の地だということが言えると思えます（スライド12）。

少し時代が違いますが、古津八幡山遺跡が盛行したのが、大体西暦の0年から西暦の200年よりちょっと前ぐらいだと思いますが、そこから400年あとぐらいに、淳足柵とか磐舟柵とかいうのが、この辺りにつくられたと言われています（スライド12）。どこで見つかるかが難しいのですが、1つの可能性として、淳足柵はどうもこの辺り、磐舟柵は村上市の岩船湯の周辺という説もあります。西日本でも畿内が中心だったところにつくられた最前基地、東北の蝦夷という方々を制圧するためにつくられたものがこの辺りにあったと言われています。時代がさかのぼって、弥生時代の後期ぐらいには、西日本の情報が伝わる極めて重要な地域だということが、時代を越えても言えると思っています。

古津八幡山遺跡は、今ほど申し上げましたように、大体西暦0年から西暦の200年のちょっと前までの100数十年間続いた村だと考えています。この頃の新潟県の遺跡では戦いに備えた、古津八幡山遺跡もそうですが、高台に村を構えて、周辺を濠で囲う高地性環濠集落がたくさん見つかります。古津八幡山遺跡が築かれていた最後のほうになると、邪馬台国の女王卑弥呼が出てきて、戦いを治めたと言われています（スライド13）。

ちょっと難しい図ですが、新潟県の弥生時代の後期につくられている環濠集落の存続期間を、少し細かく見たものです。先ほどお話しさせていただいた山元遺跡、これは村上市ですね。その南に古津八幡山遺跡があります。それ以外には大平城遺跡ですとか経塚山遺跡、上越市裏山遺跡などが環濠集落と言われているものです。弥生時代後期は、西暦0年から西暦200年ぐらいまでの期間だと思ってください。その間を、土器で時代を区切ると、3時期に区分ができると考えています。かなり年代幅がありますが、3つに区切った2つ目の段階になると、新潟県では環濠集落が多くなります。いずれも小規模なものです。古津八幡山遺跡だけは、これらのものと違います。後期を3つに区切った一番最初から環濠集落がつくられまして、最後まで続いており、小規模な環濠集落とは違う存続期間になっているとお考えください（スライド14）。

一方、濠が埋まる時期ですけれども、3段階目の段階になると、濠が埋まって、古墳時代早期とか弥生時代終末期と言われている西暦200年以降になっても、古津八幡山遺跡では人が生活の痕跡を残しています。同じように、この時期に濠が埋まるのが、妙高市斐太遺跡群の矢代山B地区です（スライド14）。これを見ていただくと、説明が難しいのですが、小規模なものは後期を3つに分けると、2段階目でパーッと広がって、一気に埋まってしまいます。しかし、大規模なものは、始まる時期は少し違いますが、3段階目に埋まっているというふうに見ただけならばと思います。戦いに備えた村で濠を掘るといことが、社会的な緊張状態とか戦乱を反映しているとすれば、埋まった時期は、社会的な緊張状態とか戦いが終結した時期ではないかと想定できます。ですので、大きいものが3段階に埋まって、小さいものがそれより先に埋まるということは、歴史的な意義があるのではと考えています。

これが、高台に構えた村ですが、一方であまり高くない場所や平地に築かれた環濠集落は、もうちょっと続きます。例えば、国の史跡になっている上越市の釜蓋遺跡です。これは新幹線新駅、上越妙高駅の真ん前にある遺跡ですが、ここでは、古津八幡山遺跡とか斐太遺跡群の矢代山B地区の濠が埋まったあと、平地に出現した環濠集落です。ちょうど高台から移転したかのような状態になっているものもいくつかあり、1つ1つに社会的な何か事情があって、濠が埋まったのではと考えています（スラ

イド14)。

今ほど言った、戦いに備えた村がなぜ出てきているのかと言いますと、これは正直考古学のほうだけだとわからないことも多いです。しかし、中国の歴史書に当時の日本の様子を記した文献があります。ご存じの方も多いかと思いますが、『後漢書東夷伝』ですとか、『魏志倭人伝』です。これらの文献によりますと、西暦147年から189年の間、倭国は非常に乱れたとあり、俗にいう倭国大乱を女王・卑弥呼が治めたと言われていています(スライド15)。考古学の立場からすると、文献にこういう記載があるので、考古学のほうもそうだったということにはなりません。あくまでも遺跡は遺跡で分析を続けて、資料を十分に吟味したあと、こういう記述があるのでそれと合致するのかどうかという検討をしていく立場です。大体これぐらいの時期に、倭国が大いに乱れていたのを卑弥呼が治めたという記載と、古津八幡山遺跡とか大規模な斐太遺跡群の矢代山B地区は、西暦の200年よりちょっと前の時期に濠が埋まっていることからすると、この文献の記載と大きく違わないというのが、今のところの自分の見解です。もしかすると、古津八幡山遺跡の環濠が埋まったのは、卑弥呼が治めたからもう戦いを行う必要がなくなったことを反映しているとも言えるのではと思っています。

ちょっと広い視点で高地性集落、高台の村をみると、今お話ししている濠で囲う村は、更に防御性が高いと言えると思います。日本海側で一番北が、山元遺跡ですが、弥生時代中期ないしは後期の初めごろまでは、能登半島までしかなかったものが、新潟県の北部まで伝わってきていることが、この分布から言えるのかなと思っています(スライド16)。

これは全国の環濠集落です。古津八幡山遺跡のガイダンス施設の資料から抜粋したのですが、濠で囲う集落というのはたくさん見つかっています(スライド17)。どちらかと言うと、西日本のものは規模が大きいです。新潟県ですと我々が古津八幡山遺跡ですとか、今ほど申し上げた妙高市の斐太遺跡群は、西日本の最大級のものと同規模です。しかし、東日本単位で見れば、かなりの規模というふうに見ていただければと思います。こういったものが、全国で分布しており、新潟県まできちんと入ってきています。非常に重要な地域だろうというふうに認識してください。

今度は、古墳時代と弥生時代の比較になりますが、

これは弥生時代後期の集落遺跡の立地を示したものです(スライド17右上)。周辺との標高差を測っていきまして、少ないほうから点で落としていきます。これは周辺との標高差がない集落です。右に行けば行くほど、周辺との標高差が大きいくというふうに見ていただければと思います。弥生時代後期ですと、一番周辺との標高差がある所が、大体80m超えます。30mぐらいで、多さが違うので、ここで私は線を引き、30m以上あるものを高台の村とします。弥生時代の後期は非常に多いのですが、古墳時代前期になると周辺との標高差が30m以上の村はなくなります(スライド17右下)。周辺と標高差がないものばかりになります。これから言えるのは、弥生時代後期は、比較的高台にたくさん村を構えています。古墳時代になると高台から下に降りてきて、平地に村を構えるという違いがあると思ってください。これからも、やはり弥生時代後期は高台に造る、戦いに備えた村が非常に多かったと言えると思います。

新潟県の戦いに備えた村を、分布に示したのですが、一番北が村上。古津八幡山遺跡がある新津丘陵の辺りから長岡に向かう丘陵上に、非常にたくさん見つかっています(スライド18左)。上越のほうでも見つかっていますが、この分布と当時使われていた土器の分布を示したのが、この図です(スライド18右)。新潟県の弥生時代後期は、全域で同じような土器が使われていたわけではありません。阿賀野川から南の海岸平野部では、北陸系の土器で、石川県の能登とか富山県と同じような様子の土器を使っています。阿賀野川以北からずっと魚沼地域にかけては、弥生土器ですが縄目の模様、縄文の模様が施された土器が使われていて、信濃川の上流のほうに行きますと長野と同じような土器を使っています。それぞれの地域の在地、地元の土器というふうに見てください。弥生時代後期に限っては、新潟県は1つのまとまりにはなっていませんで、大きく3つの文化圏に分かれています。そのちょうど境界付近に、たくさん高地性集落ですとか環濠集落があります。戦いに備えたような村があるというふうにご認識をいただければと思います。

これは新潟県の話ですが、少し広い視点で北陸全体を見渡すと、北陸でも東部と言われている石川県の能登半島から新潟県を広く見たときに、古津八幡山遺跡ですとか、先ほど分布図で見ていただいた、妙高市の斐太遺跡ぐらい大きい高地性環濠集落が築

かれているのは、富山県はどうもありませんで、石川県の能登に大海西山遺跡があります（スライド18）。昔の国で言いますと能登と加賀の境にあたります。この境に大きい高地性環濠集落が築かれています。古津八幡山遺跡も、恐らく東北と北陸の境界になっていて、斐太遺跡は北陸と信濃の境界に位置し、そういう国境に非常に大きい高地性環濠集落が築かれています。弥生時代後期を3つに分けると、3段階目の段階で濠が埋まっているため、卑弥呼が戦乱を治めたことを象徴しているのではと申し上げましたが、北陸の視点で見ても言えるのかなと思っています。

これが新潟の地図で、半径100kmでくくってみたものです（スライド19）。古津八幡山遺跡は半径100kmでくくると、会津までは入りますが、上越まではいかない。上越地域の妙高市斐太遺跡を中心として半径100kmで円を描くと、能登までは行きませんが長野県は優に入ります文化圏になっています。ここに国境があったと思いますが、古津八幡山遺跡と斐太遺跡群というのは、同じ新潟県でありながら100km以上離れて、かなり距離感がある。さらにこの辺が大海西山という、能登と加賀の国境付近のもので、大体100kmから120kmぐらいの単位で、大規模な高地性環濠集落が築かれていたと思っています。こういう背景もあり、古津八幡山遺跡が非常に重要だというふうに申し上げています。

これはちょっと余談ですが、上越の越後平野、この辺だと、かなり水はけが違うということだけ、お話しさせてください。海からずっと山手に向かってどれぐらい標高が上がるかですが、上越のほうですと、内陸のほうに20km行かない間に、もう標高が60mも上がります。ですが、越後平野のほうですと、60kmぐらい行っても、まだ標高って20mぐらいしか上がりません。山から水が流れてきても、頸城は比較的水が海に抜けていきますが、標高差がないので、越後平野は、なかなか日本海に水が抜けず、砂丘が発達して、潟湖がたくさんできる地域です。水はけが非常に悪いので、弥生時代の後期、古墳時代の前期も、それほど生産力は上がらなかったんだろうと思います（スライド20）。今でこそ日本の米どころとなっていますが、こういうような状態だったので、生産力が上がらなかったため、越後平野の中では古津八幡山遺跡以上の集落が見つかっていないというふうに見ていただければと思います。

これは私の地元、紫雲寺を流れている加治川の河

口付近ですが、おわかりになりますでしょうか（スライド21）。砂がだいぶ迫ってきていて、何もしないと河口をふさぐようなことにもなりかねません。このため、ここに大きい重機が来て、この砂を取って、水はけを少しよくすることも、越後平野の風景の中にはあります。水はけがあまりよくない所だのご認識をいただければと思います。小さいころよく言われたのが、江戸時代に自分の生まれ育った紫雲寺町には、紫雲寺潟というのがあり、長野から竹前権兵衛・小八郎という人たちが来て、紫雲寺潟を開拓したので、農業生産力が上がったと教わったのが思い出されます。江戸時代になるまで、あまりこの辺は農業生産力が高くなかったとご認識をいただければと思います。それと、弥生時代の大規模集落の存在、数量は比例していると考えています。

次に、弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物について話を移していきたいと思っています。

3. 弥生時代後期～古墳時代前期の大型建物

いよいよ本題で、弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物についてお話を進めていきたいと思っています。建物ですが、この時期はいろいろなものがあります。区分をする際に、どこをみるかですが、私は建物の床で区分をすべきと思っています。地べたを掘りくぼめる堅穴（スライド23上）と、地べたがそのまま床になる、ないしはちょっと整地したと思いますが、平地式（スライド23中）、あとは高床の建物（スライド23下）に区分をすべきだと思います。しかし、実際に遺跡を掘っていると、区分が難しいものがあります。例えば堅穴建物ですが、地べたを掘りくぼめて床をつくったとしても、あとの時代に壁を削るような造成がなされると、堅穴かどうかかわらなくなります。また、高床の建物ですが、柱だけこうポンポンポンンと見つかる場合、考古学上は掘立柱建物と呼んでいます。床が実際に高かったのかどうかは、なかなか認定が難しいです。一般的には、柱が非常に太いものは平地ではなく、床が高かったと言われていますが、何cmの柱だったら高床で、何cmの柱だったら平地という区分が、できていない状況にあります。ですので、考古学の呼び方としては、堅穴建物・住居だったり、掘立柱建物という呼び方を、平地式にしたり高床にしているとご認識をいただければと思います。非常に区分が難しいのですが、一般的には堅穴、平地式、ないしは掘立柱建物という区分進んでいます。

新潟県内で見ついている建物は、運が良いと柱材がわかります。水がグチュグチュしているような湿地を掘ると、柱が実際に残っていて、どういった樹種が使われているのかわかります。おおむねの傾向として、杉が使われているのが、糸魚川周辺と佐渡で、それ以外の地域では竪穴建物はクリで、掘立柱建物はいろんな種別の木材が使われているというのがわかってきています。杉は糸魚川と佐渡で多いのですが、それ以外、上越市から北側に行きますと、特別な建物にしか杉は使われません。数量も非常に限られていて、大きな違いがあるをご認識ください（スライド24）。建物の構成も、先ほどお話をしたように竪穴建物、平地式と掘立柱建物がありますが、その区分については、お配りしたA3の資料の表側のほうでご確認をいただければと思います。この時期の集落を掘っていきますと、佐渡は圧倒的に狭い溝の平地式の建物が多くて、続いて掘立が多く、竪穴建物はあまり多くない。糸魚川とか上越とか頸城と言われている地域は、竪穴・平地式建物が多く、この狭い溝の建物も若干あります。しかし、上越市より北では、狭い溝の建物というのはまったくなく、大体が竪穴・平地式・掘立柱建物という組み合わせの違いがあります（スライド25）。

ちょっとかたい話が続いたので余談になりますが、「のっぺ」と言われている新潟の郷土食がありますが、おおむね建物で使われる木材の分布傾向が一致するのかなと思っています。私は下越の旧紫雲寺町出身ですので、のっぺは「のっぺ」とか「小煮物」と呼び、貝柱で出汁をとって、里芋を入れるので、少しとろみがつき、いくらを乗せます。違う方いらっしゃるらご容赦いただきたいのですが（スライド26）。これが、木材に杉を使っている佐渡とか上越のほうに行きますと、いくらは乗せないというのと、とろみを片栗粉でつけるという、どうも違う文化のようです。呼び方も、「のっぺ」というよりも、「おおびら」とか「こくしょう」と呼んでいるようです。正月に「のっぺ」を必ず食べる、食べないというのを、昭和50年代後半に調べた調査がありますが、弥生時代～古墳時代前期の建物で、柱材に杉を使っている地域は、あまり正月料理に「のっぺ」は作らず、杉以外の建物の柱材を使っている地域は、正月にのっぺを食べるといような違いがあるので、おおむね弥生・古墳時代の建物の木材の選択と、現在の食べ物の分布は、一致しているようです。

次に、竪穴建物の大きさなど、いよいよ本題のほ

うに行きたいと思います。これは、弥生時代後期ですとか、弥生時代終末とか古墳時代前期ですとか中後期といった、3つの時期に分けて、1つ1つ建物の床面積を計測して、小さい順から並べていった図になります。各時期とも、大体床面積が60㎡ぐらいで分布の断絶がありますので、60㎡以上を、大型の中でも特に大型の建物と呼んでみたいと思います。こういうふうにして見ていきますと、古墳時代を前後する時代になると、特別大きい建物が多く出てくることがわかります。弥生時代の後期ぐらいですと、特大型は1つしかありません。あまり大きいものは見つからないと言えるかと思います。古津八幡山遺跡で見つかった大型建物は、これはまた新潟市の調査担当である相田さんに時期を聞かなければいけません、恐らく弥生時代の終末頃にあたると思うのですが、面積で言うところの辺になるんでしょうかね。相田 9.5×9.5。

滝沢 ああ、80㎡強で、多分この辺になると思います。ですので、新潟県の中で大型の竪穴建物が増えてくる時期に、古津八幡山でも大きい建物が見つかるようになると思います（スライド27）。

次、掘立柱建物の面積ですが、これも同じように、1つ1つ面積を計測して、同じような時期区分で図示しました。これを見ていただきますと、大体30㎡ぐらいで分布の断絶がありますので、ここから上を特別大きい建物というふうに見ていきたいと思いません（スライド28）。そうしますと、やはり古墳時代の前後ぐらいには、非常に大きいものが多くつくられるようになると言えます。冒頭、相田さんからお話があった、柏崎市の西岩野遺跡というのは、弥生時代後期にあたります。ですので、弥生時代後期では、西岩野遺跡の掘立柱建物は際立って大きいものだというふうに見てください。これ単純に床面積だけありまして、先ほどお話しした、高床かどうかの判定基準である柱の太さは加味せず、単純に面積だけのものと見ていただければと思います。

今度、これは弥生の丘展示館で配られている資料から抜粋したものです。単純に面積じゃなくて、建物の短軸と長軸で分布を示したものですが、古津八幡山の大型建物、竪穴建物というのはここにランクしてきます。かなり県内では大きいほうです。古津八幡山遺跡よりも大きいのが、上越市の釜蓋遺跡で見ついているものです（スライド29）。

古津八幡山遺跡で見ついているのは、これでありまして、新潟県内で見ついているものでも、大

きいものになります。先ほど言いました、柏崎の西岩野遺跡は、長軸が9 m、短軸が4.5mで、それに匹敵するぐらいの大きさのものが、古津八幡山遺跡で見つかったと思います（スライド30）。

以上が新潟の状況ですが、同じ北陸でも今度は建物が比較的たくさん見つかっている、石川県の加賀のお話です。現在の金沢市周辺で見つかっている竪穴建物の面積を、時期ごとに、私が示したのよりかなり細かく時期を比定して、どれぐらいの大きさのものがどれぐらいの時期見つかっているのかを示したものです。60㎡以上を特別大きい建物とした場合に、石川県では弥生時代後期が終わって、弥生時代の終末とか古墳時代の早期と言われている時期に、60㎡以上、70㎡近くの竪穴建物が非常に多く見つかっています。古津八幡山遺跡の竪穴建物の規模は、恐らくこの辺だと思います。この時期になると、際立って大きい建物が、北陸の中でポコポコと出てきますが、古墳時代の前期になると、急速に数量が少なくなっています（スライド31）。

次に、こういった大型建物が見つかる場所ですが、集落の中でもどの場所かが非常に重要になると思います。新潟県の事例で確認をしていきます。古津八幡山遺跡は、行かれた方が多いと思います。国の史跡の範囲になっている中では、これが（スライド32）環濠と言われている濠の中ではなく、国の史跡の追加を目指している範囲から見つかっています。集落の本体部分から少し離れた所を今調査していて、大型の建物が見つかりました。方形周溝墓も見つかっていますが（スライド32上）、これは環濠の外で見つかっているというのが、大きな肝かなと思っています。これが掘立柱建物（スライド32上）で、これが大型竪穴建物（スライド32下）で、いずれも濠で囲われている集落の外側で見つかっています。逆に、環濠の中は大型建物も掘立柱建物も見つかっていないということが大きな特徴であります。

これは言いづらいことですが、この掘立柱建物も、本当に弥生時代後期かというのも、非常に重要な点です。この大型の竪穴建物というのは、濠が埋まってからつくられているのかなというぐらいの年代です。ですが、掘立柱建物に関しては、柱がポンポンと出てくるだけで、個々の細かい年代は非常に決めづらいところがあります。竪穴建物に比べると、時期の比定が非常に難しいものですが、これが環濠の中にたくさん建物がつくられている時期に築かれたものなのか、それとも環濠が埋まってから、一段下

がった場所につくられているのかというので、歴史的な意義も違ってくるのかなと思っています。大胆に言えば、この辺にたくさん人が住んでいて、環濠が埋まった段階で、どうもこちらに象徴的な大型建物、竪穴建物と掘立柱建物が築かれたという想定もできなくはないと思いながら、現地を見させていたでているところです。

次に、釜蓋遺跡ですけれども、古津八幡山遺跡で環濠が埋まったあとの時期に、新たに平地ないしは低地につくられた環濠集落です。濠が合計3本あります（スライド33）。どうもこの濠は、最初にくくられた範囲はこれで、そのあとこっちのほうにもう一度濠がつくり直されていると想定ができるかと思えます。大型の建物、特大型、70㎡以上の建物というのは、3棟見つかっていて、1つがこの場所で、ちょうど最初濠で囲っていたのを、さらにここに濠をつくったあとに（スライド33下）、ここに1棟つくられているということがわかります（スライド33中）。濠ですが、この辺りの濠の内側に、大型建物がつくられているというのが調査でわかってきました。これが一辺11mとか12mぐらいと思いますが、新潟県の中では際立って大きい、大型の建物が2棟見つかっています。このうち1棟を、上越市さんが調査をしました。連続するように同じ場所に、大型の建物が築かれているということがわかってきています。

次に、柏崎市の西岩野遺跡ですが、大型の掘立柱建物がここにあります（スライド34）。西岩野遺跡は非常に広い遺跡ですが、調査したのはごくわずかです。この部分に、県道をつくるため調査されました。全体像がわからないのですが、ここの部分を掘って、大きい掘立柱建物が見つかりました。ここには、環濠と思われる濠が見つかっています（スライド34右）。ちょっと想像をたくましくすれば、環濠が築かれ、その外側に大型の掘立柱建物が築かれていて、その脇が方形周溝墓がまとまって見つかっているということからすると、墓域がこの辺にあって、何らかの祭祀を行う大型の掘立柱建物だったのかなと思います。いずれにしても、濠の外側に大型掘立柱建物があるということが、西岩野遺跡の特徴になります。

大型建物の配置を見ていくと、古津八幡山遺跡は環濠の外側、西岩野遺跡ももしかすると環濠の外側にあるかもしれません。一方で、上越市の釜蓋遺跡は、環濠の内側に大型の建物、竪穴建物があるという違いがありそうです。この違いが何なのかは、ま

だよくわかりませんが、もしかすると時期的な変遷かもしれません。弥生時代後期から続いている集落だと、濠の外側に大型建物をつくる傾向があったのが、釜蓋遺跡のように、1段階新しい時期になると建物の配置等が変わり、環濠の中に大型の建物がつくられるという想定もできるかと思っています。

今度はもう1つ見ていきます。佐渡市にあります蔵王遺跡です。蔵王遺跡の場合、大型の建物がここです。非常に細長い調査区なので、集落全体の傾向はまだわからないのですが、環濠かと言われるものが、こちら辺にあります（スライド35）。濠の、恐らく中に、こういう大型の建物がつくられているというのと、あとここに大型の掘立柱建物がありますが、これも濠の内側にあると言えるかと思っています。時期が非常にわかりづらいのですが、恐らく弥生時代の後期に濠が掘られたのではなく、釜蓋遺跡と同様に、古墳時代早期ないしは弥生時代終末期と呼ばれる時期、古津八幡山遺跡の濠が埋まった時期から集落構成を開始する遺跡かと思っています。そして、濠の内側にこういう大型のものがつくられるようになるという想定をしています。蔵王遺跡の場合、非常に建物の面積を測るのが難しく、さっき見ていただいた大型建物、これ（スライド36）ですけれども、最低でも7回の建て替えがなされています。柱の組み合わせだけでも7通りあります。柱の重複関係からすると、大型の建物が、同じ場所に7回も築かれています。古いものほど大きく、だんだん小さくなっていったって、最後役目を終えるということがわかっています。かなり大型のもので、その規模を考えてみますと、これが建物の柱の配置で、それに伴うような溝は全周しません。一部あるのを推定で追いかけていくと、床面積は200㎡近くになり、非常に大きい建物になるかなと思います（スライド36・37右下）。一番大きいと言った堅穴建物が、上越市の釜蓋遺跡で、面積が恐らく120㎡とか130㎡ぐらいの建物になると思いますが、蔵王遺跡はさらにそれを上回る大きい建物がつくられています。時期も恐らく、石川県で大きいものが見つかる時期、古墳時代早期ですとか弥生時代終末期と言われているころのものだろうと思います。古津八幡山遺跡の大型建物よりちょっと新しい時期ぐらいだと思ってください。この時期に、新潟県内でも大型の建物が集中するということと言えると思います。

こういった大型建物が築かれたあとですけれども、古墳時代の前期になりますと、どうも特別大き

い建物は、集落の中では見つからなくなります（スライド36・37右下）。一方で古墳、墳丘を持った大きいお墓というのが、全国的にたくさん見つかります。これ全国の状況を示したものです（スライド38）。一番格が高いとされる前方後円墳は、日本海側の最北は旧巻町の菖蒲塚古墳で、ここより北は、今のところはありません。それ以外、円墳と言われているもので、日本海側で一番北は今のところ胎内市の城の山古墳になります（スライド38右下）。ここから北になると、山形県の庄内平野で、古墳じゃないかと言われているものがあります。現地に行ってみましたが、まだ確定されていないようです。そのことからすると、高地性集落とか環濠集落などと同様に、古墳時代前期になっても西日本から伝わる情報が伝播する最北端が、日本海側では新潟県の阿賀野川を挟んだ辺りだったと考えられます。それが、アコーディオンのように範囲を変えていると思います。

4. 大型建物の背景

こういった大きい古墳が築かれるようになると、集落の中でも大きい建物、要は首長の居館みたいなものがあってしかるべきですが、今のところそういった状況にはありません。かえって弥生時代、古墳が築造される前のほうが、大きい建物が見つかっているとご認識ください。これについて、1990年代にいろいろな研究がなされていて、古墳が築かれるころになると、集落遺跡の中で特大型の建物が検出されなくなることから、通常の集落を飛び出して、首長の居館、特別な場所に首長だけが住むような集落構成になるのではと指摘がされていました。それを念頭に置いてずっと調査をしてきたのですが、今そういったようなものは、新潟県内ないし北陸を含めても、見つかっていません。大きい古墳が築かれるころには、むしろ建物全体が縮小していて、大きい規模のものが見つからないというのが、新潟県を含め、北陸全体の特徴になります。

新潟県で見つかったお墓の変遷では、弥生時代後期が一番大きいお墓でも10mぐらいです。これが古墳時代の早期、弥生時代の終末期とも言いますが、あまりお墓は大きくなりません。あいかかわらず10mぐらいが一番大きく、首長のお墓と言われています。この時期も大型の建物が見つかりますが、逆に古墳時代の前期、お墓の規模が30m近くになり、阿賀北の城の山古墳が40m程になります。その右側

ずっと行きますと、保内三王山古墳跡で前方後円墳が見つかり38m、その右側、信濃川左岸の山谷古墳が38m、菖蒲塚古墳が54m。そういった時期に、その古墳に被葬されたであろう人の大規模な建物は、見つかっていないというのが現状です。これは、これから見つかるのか、そもそもなくて、大きい建物自体がこの時期につくられなくなるのかというのが、1つ大きな争点になるというのが現状になります。

弥生時代後期ないしは終末期と、古墳時代前期の違いがあるというのを確認して、次、掘立柱建物の変化についても、少しお話をさせていただきます。掘立柱建物は、いろいろ柱の組み合わせで区分ができます。西岩野遺跡みたいに大きく、柱が非常にたくさんあるタイプもあります。あと、棟を持つ柱、亀甲形といって、特別な建物というふうに言われている時期もありました。それ以外に総柱、柱が内側にあるものもあります。いくつかパターンがある中で、弥生時代から古墳時代の後期まで、掘立柱建物がどういった割合で使われているのかを見ていくと、1つ大きな傾向は、総柱と言われている建物は、弥生時代後期にはないということです。その後の古墳時代前期、古津八幡山が集落構成をやめた時期から出てきます。掘立柱建物自体も、弥生時代後期、古墳時代早期ないしは弥生時代終末期よりも、前期になると爆発的に増えてくるということからすると、どうもこの辺りで建物の構成は線が引けると考えています（スライド39）。

こういった違いがありますが、古津八幡山遺跡で見つかっているこの建物、大型の掘立柱建物がいつの時期になるかで、まただいぶ評価も変わってきますが、弥生の丘展示館に行きますと、この冊子があり、復元された掘立柱建物が、想定されています（スライド40左上）。古津八幡山遺跡で見つかった掘立柱建物の柱は、非常に太くて、掘り方も大きい。面積だけじゃなくて、柱穴の掘り方も大きいので、恐らく高床だろうと想定されているのですが、私もそれでいいと思います。棟を持つ柱は、まっすぐじゃなくて、斜で復元されています。これ白山神社にある棟持柱建物と同じようなつくりになっているのですが、さっき佐渡市の蔵王遺跡で、大型の建物が出ていたと言いましたが、掘立柱建物でも大型のものが出ておまして、棟を持つ柱、柱材が実際に残っていました。それを見る限り、斜め方向に配置されているのがわかっています（スライド40右）。ですの

で、この棟を持つ柱が斜めになっている、また柱の掘り方が非常に大きいというのは、特別な建物で、恐らく神殿とか祭殿と言われているものだろうと思います。こういったものが、弥生時代の後期ですとか古墳時代の初頭ぐらいまでは残ります。しかし、前期、大きい古墳が築かれるようになると、逆にこういったものは少なくなって、同じように棟を持つ柱、独立棟持柱と呼ばれている掘立柱建物でも、柱の掘り方が非常に狭くて、残っていた柱自体も10cmぐらいの、非常に簡略化したものになってきています。ですので、同じような柱配置のものであっても、古津八幡山遺跡で見つかったものが、弥生時代の終わりとか古墳時代の早期だとすると、こういったものがあってもいいのですが、古墳時代の前期になると、棟持柱で、このような祭殿というのは、基本は新潟県の場合ははっきりしなくなるのかなと思います。そういう質的な変換があるというふうに考えています（スライド40右）。

おわりに

最後に古墳時代の集落ですが、どういった村かというのを確認させていただきます。これは村上市の道端遺跡です。同時にあった建物がどれぐらいあったかというのは難しいのですが、50～60年続いた村です（スライド41）。一番大きい建物というのが、周りに溝を掘った平地式の建物で、床面積は特大型までいかないサイズのもので、これが首長、一番この村の長の家かなと思っていますが、こういったものと掘立柱建物と竪穴建物の組み合わせが、1つ古墳時代の前期のパターンかと思っています。

同じようなことが、三条市の吉津川遺跡でも言えまして、周りを溝で囲う竪穴建物が際立った大きさを持ちます。ただこれは、特大型までいかないサイズになります（スライド42左）。その周りに、竪穴建物とか、小規模な掘立柱建物が伴います。上越市の津倉田遺跡でも同じように、周辺を溝で囲った平地とか竪穴の建物が首長的なもので、それ以外に竪穴建物ですとか、掘立柱建物が伴います（スライド42右）。近場でいろいろな建物が混在するようなあり方を見せています。これと、弥生時代に築かれた古津八幡山遺跡の建物の配置や構成というのは、少し違うと思っています。再度繰り返しますが、古津八幡山遺跡の場合は、濠の外側にこういったものがあって、大型の建物が集中する。弥生時代の後期の西岩野遺跡でも、環濠の外側に大型のものが集中す

るというのから、弥生時代の終末とか古墳時代の早期ぐらいと言われている時期になると、そういったものが1カ所にまとまって見つかるような建物構成になっていくということが、調査の結果、言えるのではないかと思います。

このことに対する意義、ここが一番重要と思いますが、こういうことをしっかり言えると、多分大学の先生になれるのかなと思います。私は発掘を専門でやっているため、データをそろえて、ある一定の傾向をお伝えすることはできますが、なかなかそこから先、歴史的な解釈というところまで行くと、ちょっと口ごもってしまいます。ただし、古墳の規模が、お墓の規模が甚だ大きくなる時期に、そういった首長居館的なものが見つからないということからすると、どうも建物の大きさに関する考え方自体が、変わってきているのではないかと思います。むしろ集落の中できちんと、大きいものはつくるにしても、際立った大きさを持たない、建物自体の大きさに固執せずに、むしろ威信財、さっきの鏡とかいろいろなものですね、特別なものを持つほうに労力を使っていくのが、この辺りの集落のあり方ではないかと、今は考えています。一方で、古津八幡山遺跡で見つかった大型の竪穴建物は、恐らく居住のものだろうと思うのです。ですが、掘立柱建物は祭祀的なものだと思っていますが、それに、大型の建物に見合うようなお墓というのが、古津八幡山遺跡の場合はどこにあるのか。今のところまだ、それに見合う時期のものは見つかってないと思います。そういったものの配置なんかも、今後発掘調査を通じて、検討していくべきことなのかなと思っています。

以上、なかなかまとまらない話で恐縮でしたが、新潟県の状況についてお話をさせていただきました。

北陸における弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物とその背景

—新潟県を中心に—

令和元年9月1日
滝沢規朗

スライド1

本日のお話

- 1 縄文時代から弥生時代へ
- 2 弥生時代後期に出現した古津八幡山遺跡の重要性
- 3 弥生時代後期～古墳時代前期の大型建物
- 4 大型建物の背景

スライド2

1 縄文時代から弥生時代へ

- ①稲作の導入
- ②金属器の使用
- ③戦いの村(環濠集落。高地性集落?)
- ④ガラス製品
- ⑤方形周溝墓
- ⑥鳥形製品、弥生記号、卜骨、磨製石器

スライド3

○縄文人の顔立ち

大陸からの渡来弥生人に比べ、寸詰まりで立体的な顔立ち

縄文人と渡来系弥生人



スライド4

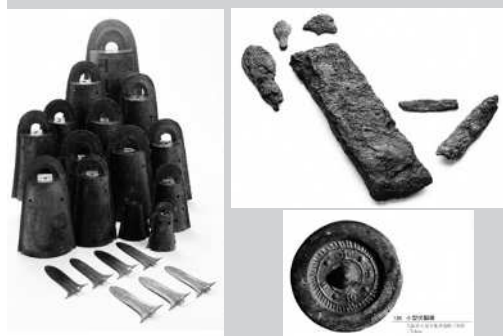
弥生文化とは

- ①稲作の導入(大陸から伝来)



スライド5

②金属器の使用(青銅器・鉄器)

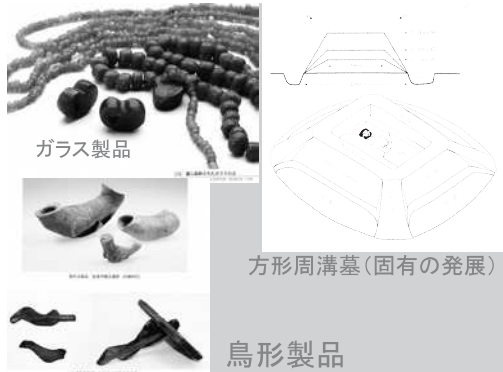


スライド6

③戦いの村(小国分立)



スライド7



スライド8




スライド9

番外編(犬)

- 縄文時代
 - ・全身の骨が揃って見つかるものが多い(埋葬されたものもあり)
- 弥生時代
 - ・散乱骨の比率は縄文時代より多い。(230個体中、全身が残るは15例)
 - ・解体され、食用資源・素材に使用されたが可能性が高い。

(内山幸子「狩猟犬から食用犬へ」『弥生時代の考古学』5 同成社)



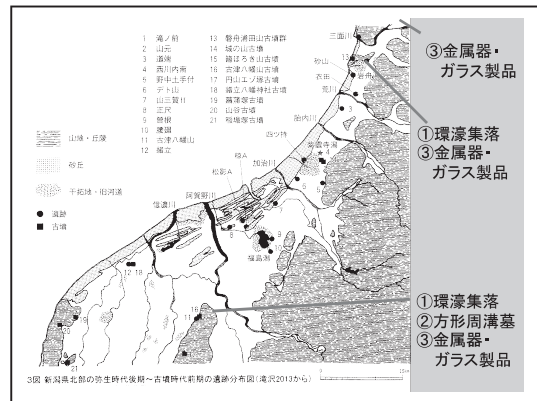
スライド10

2 弥生時代後期に出現した古津八幡山遺跡の重要性

- ・弥生文化の要素が揃う日本海側最北の遺跡(又はその一つ)。
- ・県内では有数の大規模集落
- ・弥生時代の集落が廃絶?した後に、県内最大の古墳が築造される

※国史跡に指定後に整備され、ムラの様子が分かる国内でも有数の遺跡

スライド11



スライド12

古津八幡山遺跡築かれた弥生時代後期～古墳時代初頭はどんな時代・時期か

新潟 さいごんナビ
SAITO MAISON navi

年代	時代	日本の主なできごと	新潟県の主なできごと	新潟県の主な遺跡
300	弥生時代	郡県制の導入 金匱書が完成	高野集落が形成される 雲出石環濠古墳が竣工	丸尾環濠(村上山)・早坂環濠(長岡市) 菅野環濠(新潟市)
300	古墳時代	高麗百濟の文王卑弥呼が魏に使者を送る 前方後円墳が流行する	各地に古墳がつくられる 古墳の数が増加する	新津市(環濠群(伊賀町)) 佐野(大塚山遺跡(新津市)) 佐野(大塚山遺跡(新津市)) 佐野(大塚山遺跡(新津市)) 佐野(大塚山遺跡(新津市)) 佐野(大塚山遺跡(新津市)) 佐野(大塚山遺跡(新津市)) 佐野(大塚山遺跡(新津市))

スライド13

第4表 県内の後期環濠集落の存続期間

遺跡名	立地	規模	0 200					
			中期	1	2	3	4	5
山元	高地	小規模
古津八幡山	高地	大規模
大平城	高地	小規模
経塚山	高地	小規模
裏山	高地	小規模
百両山	高地
上ノ平・矢代山A	高地	大規模
矢代山B	高地
横山	低丘陵	小規模
西谷	低丘陵	小規模
釜蓋	低地	大規模

..... 土器・若干の遺構有り。
■ 主体時期

スライド14

倭国大乱

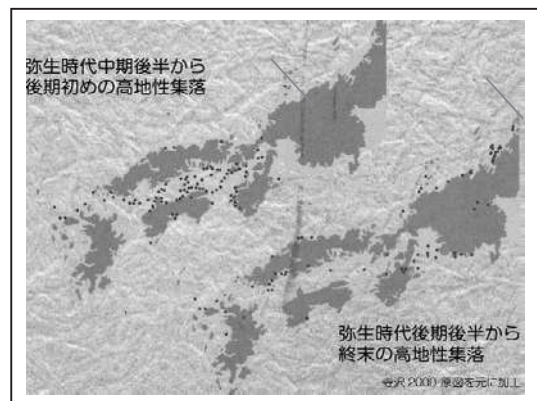
佐賀県吉野ヶ里遺跡

【文献資料など】

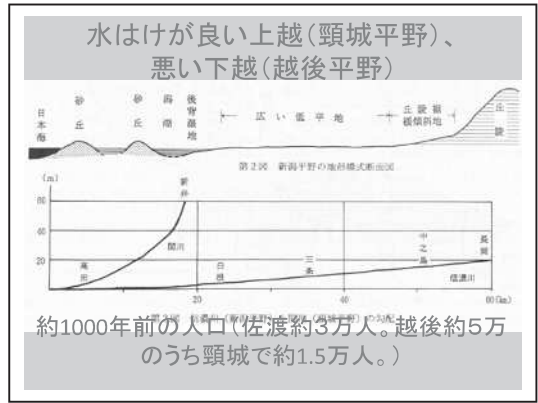
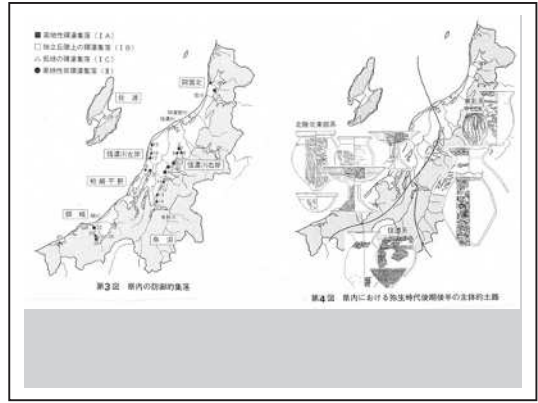
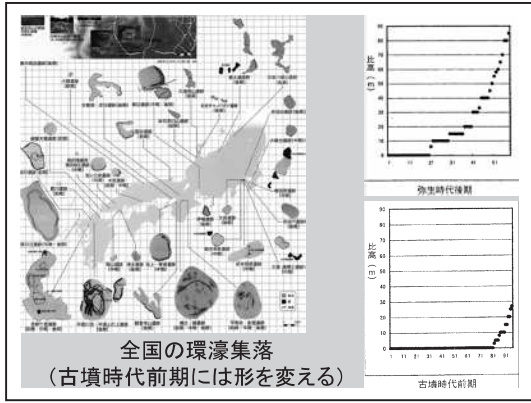
- ・小さいウニが100ほどあり。
- ・桓霊の間(AD.147-189)、倭国大いに乱れ(「倭国大乱」(『後漢書』東夷伝)。
- ・邪馬台国の女王・卑弥呼が戦乱治める。
- ・卑弥呼は247年に死去。吾与が王となり再び治める

<畿内のヤマト政権>

スライド15



スライド16



3 弥生時代後期～古墳時代前期の大型建物

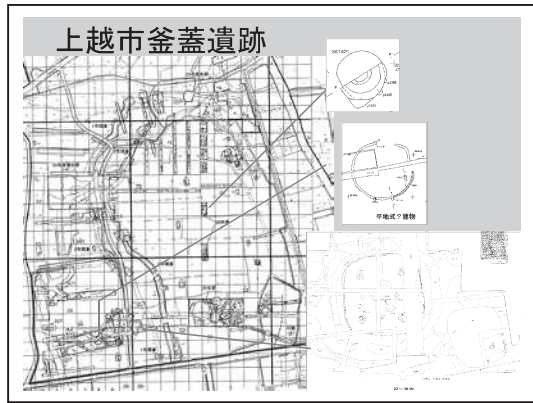
分類	遺跡での検出・復元	考古学の呼び方
竪穴建物		竪穴建物(住居)
平地建物		平地建物(溝の有無で区分)
高床建物		掘立柱建物

スライド23

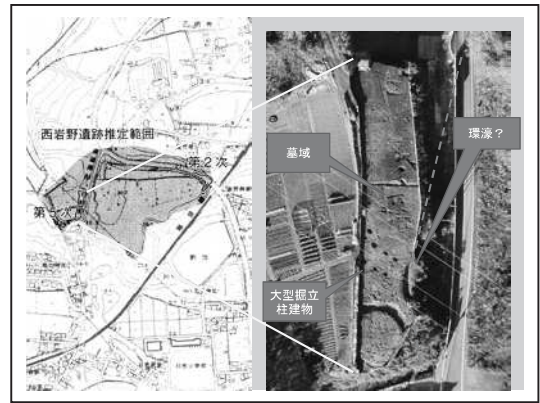
第1表 竪穴建物群の年代別集計

地区名	検出	年代	種類	特徴
新潟県 新潟市	1	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 長岡市	2	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 上越市	3	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 佐渡県	4	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 越後県	5	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 富山県	6	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 石川県	7	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 福井県	8	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 岐阜県	9	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 愛知県	10	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 静岡県	11	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 東京都	12	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 千葉県	13	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 埼玉県	14	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 茨城県	15	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 栃木県	16	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	17	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	18	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	19	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	20	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	21	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	22	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	23	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	24	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	25	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	26	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	27	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	28	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	29	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	30	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	31	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	32	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	33	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	34	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	35	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	36	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	37	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	38	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	39	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	40	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	41	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	42	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	43	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	44	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	45	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	46	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	47	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	48	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	49	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	50	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	51	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	52	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	53	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	54	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	55	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	56	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	57	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	58	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	59	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	60	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	61	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	62	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	63	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	64	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	65	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	66	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	67	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	68	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	69	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	70	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	71	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	72	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	73	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	74	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	75	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	76	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	77	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	78	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	79	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	80	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	81	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	82	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	83	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	84	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	85	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	86	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	87	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	88	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	89	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	90	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	91	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	92	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	93	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	94	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	95	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	96	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	97	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	98	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	99	弥生時代後期	竪穴建物	...
新潟県 群馬県	100	弥生時代後期	竪穴建物	...

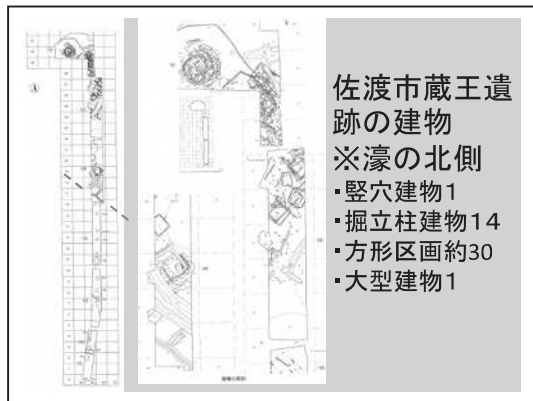
スライド24



スライド33

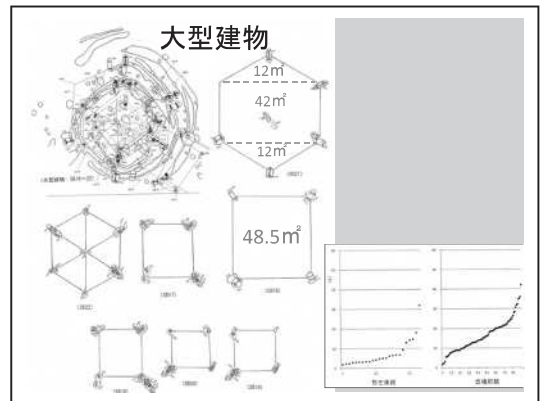


スライド34

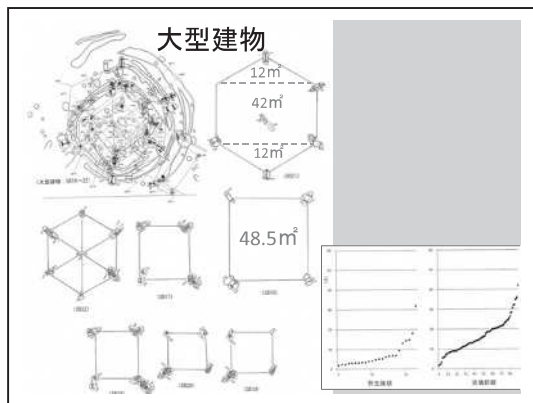


スライド35

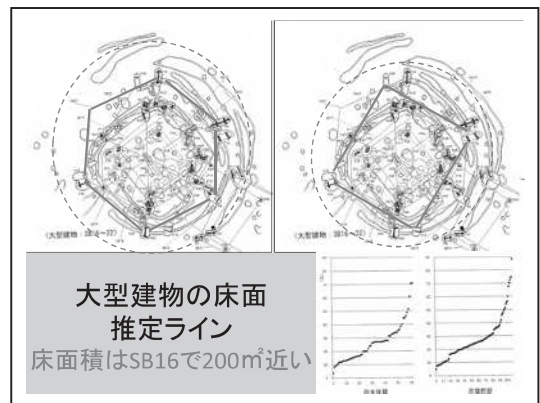
佐渡市蔵王遺跡の建物
 ※濠の北側
 ・竪穴建物1
 ・掘立柱建物14
 ・方形区画約30
 ・大型建物1



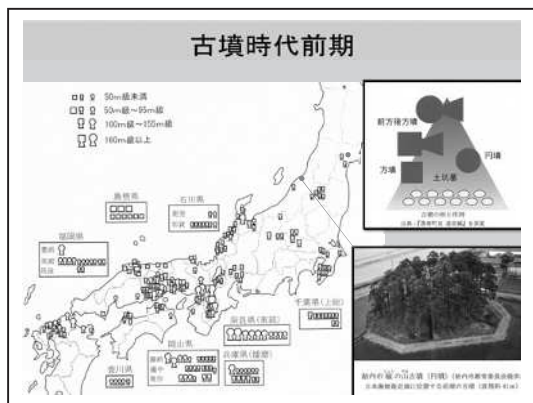
スライド36



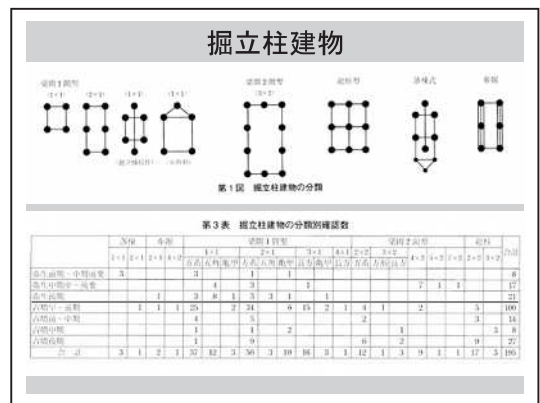
スライド37



スライド38



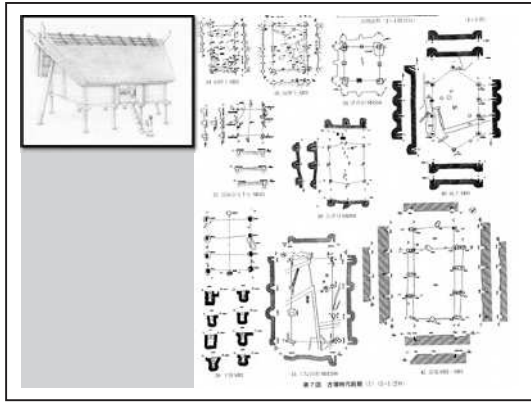
スライド39



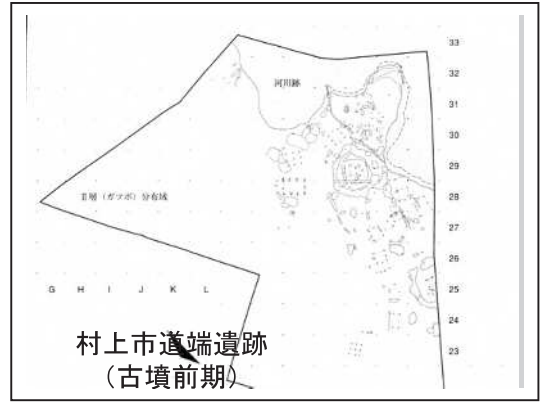
スライド40

第3表 掘立柱建物の分類別確認数

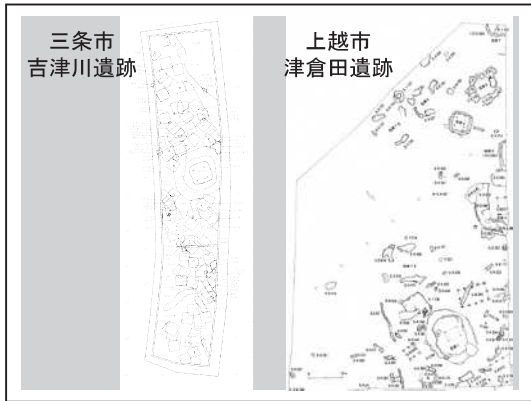
変形1型	変形2型	変形3型	変形4型		変形5型		合計						
			1	2	1	2							
1	1	1	25	2	34	6	15	2	1	1	2	3	100
1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	3	14
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	27
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	21
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	100
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	27
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	100



スライド41



スライド42



スライド43

講演会などのお知らせ

- ①10月5日
 - 柏崎市アルフォーレ
 - 講演: 広瀬和雄先生
 - 新潟市の方も報告
- ②新潟県埋蔵文化財センター
海をわたったヒスイ(9/5~12/8)
- ③糸魚川の歴史遺産
10/26見学会 10/27講演会
- ④新潟大学附属図書館展示(右上写真)
「邪馬台国前後の土器の移動～小さな土器片が語る交流の歴史～」

スライド44

図・写真の出典

- スライド4：集英社1999『縄文世界の一万年』
- スライド5：上・山川出版社2013『詳説 日本史図録』第6版、下・福島県立博物館1993『東北からの弥生文化』、
- スライド6：左・長野県立歴史館2009『山を越えて川に沿う』、右・奈良県立橿原考古学研究所2005『ムラの変貌－弥生後期の和とその周辺』
- スライド7：上と左下・山川出版社2013『詳説 日本史図録』第6版
- スライド8：左上・奈良県立橿原考古学研究所2005『ムラの変貌－弥生後期の和とその周辺』、左下・新潟県立歴史博物館2009『弥生時代のにいがた』、右・福島県教育委員会・福島県文化振興財団2014『桜町言う席（第5次）ほか』
- スライド9：新潟県立歴史博物館2009『弥生時代のにいがた』
- スライド12：滝沢規朗2013『阿賀北における弥生後期の北陸系土器について』『三面川流域の考古学』第11号 奥三面を考える会
- スライド13：新潟県教育委員会『新潟まいぶんナビ』増刊号
- スライド14：滝沢規朗2009「まとめ」『山元遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団に加筆
- スライド15：右・上山川出版社2013『詳説 日本史図録』第6版
- スライド16：新潟市埋蔵文化財センター2013『弥生の丘展示館ガイドブックNO.2』（弥生時代編）
- スライド17：左・新潟市埋蔵文化財センター2013『弥生の丘展示館ガイドブックNO.2』（弥生時代編）、右・滝沢規朗2009「まとめ」『山元遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- スライド18：滝沢規朗2009「まとめ」『山元遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- スライド20：坂井秀弥1993『古代越後の環境・生産力・特性』『新潟考古学談話会』第12号 新潟考古学談話会
- スライド22：川村浩司1996『越の土器と古墳の展開』『越と古代の北陸』名著出版
- スライド23：左上・新潟市教育委員会2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』、左中・佐渡市・佐渡市教育委員会2015『東沢遺跡』、左下・佐渡市・佐渡市教育委員会2017『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』、真中の上・都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』、真中の中・鹿取渉2015『第六章1 方形区画溝について』『東沢遺跡』佐渡市・佐渡市教育委員会、真中の下・新潟市文化財センター弥生の丘展示館2019配布資料
- スライド24：滝沢規朗2019『新潟県における弥生時代～古墳時代の掘立柱建物』『磨斧作針』橋本博文先生退職記念論集
- スライド25：右上・鹿取渉2015『第六章1 方形区画溝について』『東沢遺跡』佐渡市・佐渡市教育委員会
- スライド26：渋谷歌子・本間伸夫・石原和夫・佐藤恵美子1988『新潟県の郷土食に関する研究（第22報）』『県立新潟女子短期大学研究紀要』第25集
- スライド27：滝沢規朗・鹿取 渉2018『弥生時代後期～古墳時代前期の佐渡市蔵王遺跡について』『三面川流域の考古学』第16号 奥三面を考える会
- スライド28：滝沢規朗2019『新潟県における弥生時代～古墳時代の掘立柱建物』『磨斧作針』橋本博文先生退職記念論集
- スライド29：新潟市文化財センター弥生の丘展示館配布資料2019
- スライド30：新潟市文化財センター弥生の丘展示館配布資料2019
- スライド31：浜崎 悟1993『加賀における集落構成要素』『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会を一部改変
- スライド32：新潟市文化財センター弥生の丘展示館配布資料2019など
- スライド33：上越市教育委員会2013『釜蓋遺跡確認調査概要報告書』1
- スライド34：柏崎市教育委員会2019『西岩野2』
- スライド35：佐渡市・佐渡市教育委員会2017『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』に加筆
- スライド36・37：滝沢規朗・鹿取 渉2018『弥生時代後期～古墳時代前期の佐渡市蔵王遺跡について』『三面川流域の考古学』第16号 奥三面を考える会
- スライド38：滝沢規朗・鹿取 渉2018『弥生時代後期～古墳時代前期の佐渡市蔵王遺跡について』『三面川流域の考古学』第16号 奥三面を考える会
- スライド39：左・（財）大阪府文化財センター2006『古式土師器の年代学』、右・新潟県教育委員会2015『遺跡が語る弥生・古墳時代の越後』
- スライド40：滝沢規朗2019『新潟県における弥生時代～古墳時代の掘立柱建物』『磨斧作針』橋本博文先生退職記念論集
- スライド41：左・新潟市文化財センター弥生の丘展示館配布資料2019、右・滝沢規朗2019『新潟県における弥生時代～古墳時代の掘立柱建物』『磨斧作針』橋本博文先生退職記念論集
- スライド42：新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団2005『道端遺跡Ⅲ』
- スライド43：三条市教育委員会2008『吉津川遺跡』、上越市教育委員会1999『津倉田遺跡』